

新・山手樹一郎著作年譜 補遺Ⅱ

影山 亮

本年譜は『新・山手樹一郎著作年譜 およびその制作過程』（『立
教大学大学院日本文学論叢』一三号、平成二五年一〇月、立教大学
大学院文学研究科日本文学専攻）の補遺であり、同一四号に掲載し
た『新・山手樹一郎著作年譜』補遺Ⅰに続くものである。すでに多
くの著作を新たに発見しているため、今回発表するほとんどが随筆
に分類される著作である。

山手の随筆は全集等にもほとんど扱われておらず、井口朝生編
『あのことこのこと』（平成二年二月、光風社出版）においても、

「山手樹一郎には随筆、エッセーその他いわゆる雑文の類がき
わめて少ない。無名時代は換金作業に追われて戦後は読者の求
めに応じるため、つまり依頼原稿をこなすのが精いっぱい、
精神的にも、大衆小説以外のものを書く余裕はなかったよう
である。（略）数少ない随筆、エッセーなどを、散逸しないよう
にまとめておきたいと、かねがね考えていた」

と言及されている。確かに個々の随筆だけで見れば、深いことが書
かれていないが、山手の文学についてその全貌を明らかにするうえ
では欠かせない資料であるため引き続き発見に努めたいと考えてい
る。最後に表記についてだがゴシック体の太字になっていない著作
は、すでに存在が知られていたが初出年月が今回の調査で明らか
になったものである。また連載ものの初出紙誌月日の巻号が「？」に
なっている場合があるが、これは連載開始時の巻号は判明したもの
の、連載終了時の巻号は様々な施設や方法で調査したものの確認出
来なかったからである。

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
昭和一二(一九三七)年	螢の光 窓の雪	井口長一	小説	コドモニッポン	4・1〜6	
昭和一九(一九四〇)年	片岡千恵蔵に喰はれる	山手樹一郎	随筆	映画ファン	5・2	
昭和一九(一九四四)年	作品合評	山手樹一郎他〔註1〕	合評	大衆文芸	6・2	
昭和二三(一九四八)年	まごころの旅	山手樹一郎	小説	面白世界	5月号	
	鼠のいが笑ひ	山手樹一郎	小説	日本ユーモア	3・4	
	緋牡丹の夢	山手樹一郎	小説	日本ユーモア	別冊	
	紅顔秘帖	山手樹一郎	小説	ユーモア	12・12	『春の虹』S27(1952)9月・ 同人社磯部書房
昭和二四(一九四九)年	葵は散りぬ	山手樹一郎	小説	日本ユーモア別冊	3・10	
	九年の恋	山手樹一郎	小説	読切雑誌	3・1	
	花嫁をんな大学	山手樹一郎	小説	娯楽よみもの	1・1	

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
2 1	幕末恋模様	山手樹一郎	小説	娯楽よみもの	2・1	
4 10	あばれ酒	山手樹一郎	小説	小説の華	第3集	
6 1	形見草	山手樹一郎	小説	ポケット文庫	1・2	
9 1	昔の旅〔註2〕	山手樹一郎	随筆	ユーモア	13・9	
10 10	怨讐の果てに	山手樹一郎	小説	小説の華	10月号	
昭和二五（一九五〇）年						
2 1	街に出た若殿	山手樹一郎	小説	実話と読物	22・2？	『街に出た若殿』S28（1953）9月・ 文芸図書出版社
11 1	春の虹	山手樹一郎	小説	青年	35・8？ 36・1	『春の虹』S27（1952）9月・ 同人社磯部書房
昭和二六（一九五二）年						
8 1	江戸むらさぎ	山手樹一郎	小説	読切小説集	3・8？	
昭和二七（一九五二）年						
6 1	おこつわり〔註3〕	山手樹一郎	随筆	読切小説集	4・6	
7 1	お艶恋模様	山手樹一郎	口絵	読切小説集	4・7	
昭和二九（一九五四）年						
6 1	なつかしい講談	山手樹一郎	随筆	単行本書き下ろし		『講談全集 清水次郎長』S29（1954） 6月・大日本雄弁会講談社

11 1	昭和四〇(一九六五)年	飲み・食い・飲み	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	114		月日
11 30		悼句	山手樹一郎	俳句	単行本書き下ろし		『菊佛』S39 (一九六四) 11月・ 桑山太市朗	作品名・書名
11 1		湯豆腐に当てられる	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	102		執筆名
6 1		長谷川伸一周忌	山手樹一郎他〔註4〕	座談会	大衆文芸	24・6		種類
5 1		薬酒の味	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	96		初出誌・紙名
10 1		昭和三五(一九六〇)年	籠の鳥	山手樹一郎	随筆	大衆文芸	23・10	初刊本
6 1			ほろ酔い量	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	85	
2 1		昭和三七(一九六二)年	湯豆腐の味	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	69	
10 1			豆腐の味	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	53	
7 1			今も昔も	山手樹一郎	随筆	婦人公論		
1 20	序	山手樹一郎	序文	単行本書き下ろし			『文壇登竜』S35 (一九六五) 1月・ 池田書店	

月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初刊本
昭和四一（一九六六）年	実作者の立場から	山手樹一郎	随筆	単行本書き下ろし		『大衆文学研究への招待』S41 (1966)2月・南北社
昭和四二（一九六七）年	酒の肴	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	130	
昭和四三（一九六八）年	酒の肴	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	130	
昭和四五（一九七〇）年	銭勘定	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	150	
昭和四六（一九七二）年	思い出すままに	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	166	
昭和四七（一九七二）年	酒の肴あれこれ	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	180	
昭和四七（一九七二）年	推せん文	山手樹一郎	序文	単行本書下ろし		『癩病棟』S46(1971)6月・ 桃園書房
5 1	耄碌除け	山手樹一郎	随筆	あじくりげ	192	
発表年不明作品						
	青春八景	山手樹一郎	小説	読切小説集	9・1	

【註】

〔1〕昭和一九（一九四四）年『大衆文芸』に掲載された「作品合評」は、山手の他に村上元三、森健二、大林清、矢田彌八、梶野憲三がこの合評に参加している。

〔2〕「昔の旅」では、山手が三代目中村仲藏の手記『手前味そ』を、自らの作品の種本として書くことが書かれている。

〔3〕「おこたわり」は、「江戸むらざき」の前篇が終った昭和二七年六月の『読切小説集』四巻六号の編集後記に、後篇に関して山手から読者に向けたおこたわりを掲載している。

〔4〕昭和三九（一九六四）年に『大衆文芸』に掲載された「長谷川伸一周忌」は山手の他に山岡莊八、戸川幸夫、棟田博、池内祥三、村上元三、鹿島孝二、平岩弓枝、長谷川七保、島源四郎、土師清二（司会）が参加した座談会である。

【紙誌出版社一覧】

『読切小説集』（荒木書房新社）／『読切雑誌』（雨読書院）／『ユーモア』（春陽堂）／『ユーモア』（新春社）／『日本ユーモア』（日本ユーモア社）／『日本ユーモア別冊』（日本ユーモア社）／『実話と読物』（博文閣）／『コドモニッポン』（コドモニッポンクラブ）／『小説の華』（八千代書院）／『あじくりげ』（名古屋タイムズ社内東海志にせの会）／『大衆文芸』（新小説社）／『映画ファン』（映画世界社）／『面白世界』（面白世界社）／『娯楽よみもの』（娯楽よみもの社）／『婦人公論』（婦人公論社）／『青年』（日本青年館）

（かげやまりよう 本学大学院博士課程後期課程）